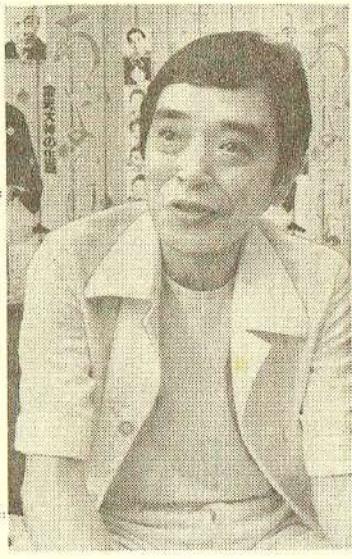


金光さんが舞台になつた。幕末、維新の動乱期、備中國（岡山県西部）で平凡な農民として生活を営み「神をとらえた」金光教祖、生神金光大神（赤沢文治、一八一四—一八八三）。来年の夏後百年を前に、その生涯を描いた劇『あいよかけよ——金光大神の生涯』が十二日から大阪・道頓堀の朝日座で上演される。主演は信者の中村扇雀さん。かつて「天子様も人間」と國家神道への従属を拒否し、どこまでも「天地の道理」に基づいた内面的教説を重視、政治に対し中立を貫いた金光さんは、いま世にどうみがえるのだろうか。

（浦田 知隆記者）

## 金光大神の生涯が舞台に



1982年(昭和57年) 9月7日(火曜日)

# 心の救済 政治に中立を貫く

「現代へ大きな意味」演出の竹内伸光さん

金光さんの舞台化に取り組む演出家、竹内伸光さんは、上顎を控え、緊張感に甲斐ぶざうな毎日だ。宝塚歌劇団、梅田コマ劇場などでショーキュージカルを手がけてきた故菊田一夫氏の門下生。宗教と舞台の大衆性【宗教の持つ内面的な世界と舞台の大衆性をどう下ラマの中で結びつけるか、責任感でいっぱいです。まして、私は不良信者ですか】そもそもものきっかけは、二年前の秋のこと。ミュージカル「ああ、野麦峠」の公演が失敗し、竹内さんは二千万円近い赤字を抱え込んだ。身も心も口ボロ。借金取りに追われる生活だつた。

『おかげ』は心の問題【そのとき、母に「信心が足りんからじや」といわれ、何十年かぶりに教会に行つたんです。苦しいときは神頼み。すると、おかげ（現世利益）の有る無しは、実意丁寧に信仰しているかどうか、人間の問題だ、と教えられ、涙ができるほど感激したんです。おまえは、ほんとうに誠意を尽していいか、といわれて…】

それから教祖の本を読みあさった。猛烈に舞台化の意欲がわいた。知り合いのプロダクション社長が、たまたま金光教大阪教会長と親しくトントン拍子に上演した。竹内さんはしみじみいざな話を聞き、「ぜひ、金光さんは話を聞くつもりはぜんぜんない。

光さんをやらせて」。鷹治郎さん（二代目）も「たとえ一幕でも」と名乗り出る。『教祖百年祭に迎合す

## 宗教人生

### 「人間的な深みを」

主演の竹内伸光さん

ただ、因縁を感じますね」

感でいっぱいです」と語る演出の竹内さん

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家の二男として生まれた。十二歳で養子に

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家の二男として生まれた。十二歳で養子に

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家の二男として生まれた。十二歳で養子に

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家の二男として生まれた。十二歳で養子に

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家の二男として生まれた。十二歳で養子に

金光さんは人間が欲を去り、村の人たちは恐ろしい金神（こんじん）のたまりと恐れたが、金光さんは「誠実に生きる人間を神が苦しめるはずがなく、人間の生き方に応じて、助ける神さまにちがいない。金神こそ天地の祖神、愛の神、天道教が、神による理想世界の実現という世直し願望を秘めている。同じ時期に、農民の間に生まれ、発展した天理

金光さんは人間が欲を去り、村の人たちは恐ろしい金神（こんじん）のたまりと恐れたが、金光さんは「誠実に生きる人間を神が苦しめるはずがなく、人間の生き方に応じて、助ける神さまにちがいない。金神こそ天地の祖神、愛の神、天道教が、神による理想世界の実現という世直し願望を秘めている。同じ時期に、農民の間に生まれ、発展した天理